

## <資料>

# 保健師養成における乳幼児と母親の支援に関するZoomを使用した 学習プログラム —令和3年度教育向上・改善プログラムの実施報告—

明野 聖子\*、田中 裕子\*、工藤 禎子\*

### 抄録：

**目的：**保健師養成における乳幼児の発育・発達と支援への理解を深める学習のために、本学の令和3年度教育向上・改善プログラムとしてZoomを活用したプログラムにより、学生が学んだ内容と協力家族の気づきを振り返り、今後の教育方法の参考とする。

**方法：**保健師養成カリキュラムの一環としての母子保健の授業において、学生13人がZoomを介して乳幼児と保護者と交流する機会を設けた。本プログラムの評価の方法として、学生および協力家族からのアンケートを量的、質的に分析した。

**結果：**学習目標①子どもの発育・発達の理解、②母親の生活や育児への思いの理解、③乳幼児健診・保健師のあり方の理解の3項目について、全員が、本プログラムが学習目標の達成に役立ったと回答した。学生の学びの内容は【子育て家庭の実際の生活と育児の理解】【母子への共感的理解】【母子保健に関する既習事項の深化】【出産・育児にまつわる母子の状況とニーズの多様性の理解】【複数の児・きょうだいを見る視点の理解】【母子の個別性に沿った支援の理解】【コロナ禍の支援の必要性の理解】【保健師としての受容的な支援の重要性の理解】【保健師への期待の理解】であった。協力家族からの気づきは【学生の態度への肯定】【発育・発達の理解への協力】【学生に伝えたかった育児中の母親の大変さ】【学生の意図を汲んだ対応】【保健師に期待する母親への支持的関わり】【直接触れ合う体験の意義】【他の母親との交流・共感】【Zoomという手段における対応】【参加への意義と感謝】であった。

**考察：**Zoomの活用は、学生が乳幼児と母親と交流し、育児中の母子の状況と支持的な関わり的重要性を理解する学習に有用であることが明らかとなった。今後の教育プログラムの改善において、学生の準備学習および協力家族との事前の準備、プログラム進行時の配慮などの検討が必要である。

キーワード：保健師教育、母子保健、乳幼児健診、公衆衛生看護学実習、Zoom

## I 緒言

多様化・複雑化する育児中の家族の課題を支援する専門職としての保健師には、高度な知識と支援技術が求められている。一方、少子化、核家族化等の影響を受けて、現在の看護学生の多くにとって乳幼児と関わる機会は限られており、児の発育・発達や育児中の保護者の思いを深く理解することは教育上の課題となっている。

全国保健師教育機関協議会教育課程委員会では、親子保健活動における公衆衛生看護技術の体系化<sup>1)</sup>に取り

組み、支援の基礎として「子どもと家族に関する情報収集」「子どもと家族に関するアセスメント」等を公衆衛生看護技術の項目として挙げている。保健師として子どもと家族に的確な支援を展開するためには、対象者に関する情報収集とアセスメントの技術を高めることは必須である。

北海道医療大学の教育向上・改善プログラム（平成31年度～令和3年度）において、保健師教育に必須の公衆衛生看護学実習で体験する母子保健事業（家庭訪問、健診、育児教室など）の教育向上のための助成を受け、3年間の事業として展開している。

初年度の平成31年度は、学生が乳幼児に触れる体験を

\*北海道医療大学看護福祉学部看護学科

増やすプログラムの必要性から、目的を（1）学生と乳幼児が接する学習プログラムに協力して下さる育児中の家族（以下、協力家族）の募集と登録システム作成、（2）実際の学習プログラムの構築と運営（学生が乳幼児と保護者から発達や育児の実際を学ぶプログラムの企画と運営）を掲げた。このプログラムで学生が乳幼児と保護者から発達や育児の実際を学ぶことができた効果等について、本紀要第26号に報告済みである<sup>2)</sup>。

2年目の令和2年度は、新型コロナウイルス感染症による交流の制限をふまえ、乳幼児と家族等に関する視聴覚教材を充実させ、母子の現状を視聴覚教材から理解するプログラムとして実施した。

最終年の令和3年度は、新型コロナウイルス感染症の蔓延が収まらない中、社会的にオンラインでの交流が一般化したことをふまえ、教育向上・改善プログラムを、Zoomを使用したプログラムとして試みた。

本プログラムに期待される効果と展望は以下である。

(1)学生にとって、保健師として求められる母子保健の技術・態度・知識を高いレベルで修得することが可能となり、保健師としての母子保健領域の実践力が高まる。

(2)保健師としての資格取得のため学習と現場で求められる実践力の差が縮小され、新人期の適応上の課題が一部緩和される。

(3)協力した母親（育児中の卒業生等）にとって、社会参加、社会貢献による自己肯定感が高まる。

(4)本プログラムが継続され本学卒業生の母子保健に関する実践力の高さが評価を得ることにより、保健師としての就職の促進や、実習現場と本学の連携の促進要因となる。

本報告の目的は、保健師養成における乳幼児の発達への理解を深める学習のために、本学の令和3年度教育向上・改善プログラムとして行った、Zoomを活用した育児中の母子（以下、協力家族）から学生が学んだ内容と協力家族の気づきを振り返り、今後の教育方法の参考とすることである。

## II 方法

1) プログラム実施時期：令和3年度の実施は保健師養成コースの授業として、4月の公衆衛生看護活動展開論V（母子保健）において、協力家族の都合に合わせて2日間に渡り行った。

2) プログラムの運営について

プログラムの運営のために実施したことは以下である。

(1)保健師養成コースの学生が協力家族から学ぶプログラ

ムを実施する日程の確保

(2)運営

① 協力家族への目的説明、協力内容、参加日の調整（育児中で電話に出にくいことが想定されるため、Eメール等による連絡手段をとった。）

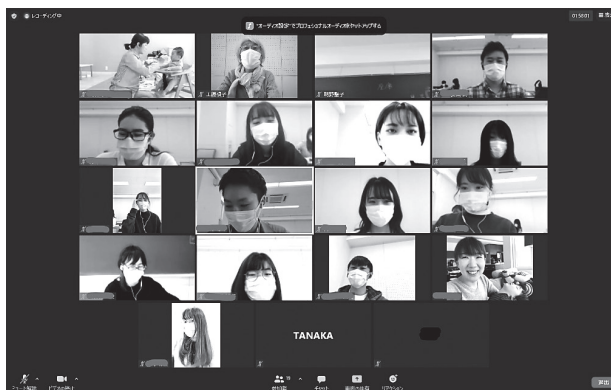
② 協力家族へのZoomに関する事前の調整・確認

③ 学生のZoomの準備（学生個々が教室にパソコンを持参し、イヤホンで視聴した。）

④ 学生・協力家族の授業への参加

協力家族が、児の様子を見せ、育児中の生活、母親としての思い、保健師および乳幼児健診に期待すること等を話し、学生がインタビューをして回答していただいた。進行は教員が担当した。プログラム実施時の様子は図1の通りである。

図1 Zoomでの学生と協力家族の交流場面



3) 本プログラムに関する評価内容

学生からの評価はGoogleフォームによる量的・質的内容を含むアンケートを用い、協力家族からは紙面での質的なアンケートを郵送で回収し評価の素材とした。教員はプログラム全体に関する振り返りの討議を行った。

学生の学習目標に関しては、授業終了後にGoogleフォームで、①子どもの発育・発達への理解、②母親の生活や育児への思いの理解、③乳幼児健診・保健師のあり方の理解の3項目について、本プログラムが目標達成に「役に立った」「(あまり)役に立たなかった」かを2件法で回答を得た。上記の項目の後に、本プログラムで印象に残ったこと、学んだことを自由記載で回答を得た。

4) 分析方法

学生、および協力家族からのアンケートの自由記載を類似する内容に並べ、カテゴリー化した。

5) 倫理的配慮

学生及び、協力家族に、本プログラムと報告の趣旨、個人情報の保護、報告内容で個人が特定されることがな

いことを口頭等で説明を行い、了承を得た。

協力家族には、プログラムの参加にあたり、児と母親の心身の調子を優先して無理をしないこと、体調不良時のキャンセル等を気にしないで頂くことをあらかじめ説明した。

### Ⅲ 結果

本プログラムに参加した学生は13名、協力家族は3家族である。協力家族はいずれも本学部看護学科の卒業生であり、保健師、看護師経験を有していた。児は、きょうだいを含め、2か月児から3歳児までであった。

#### 1) 学生からのプログラムの評価

学習目標に関しては、表1のように①子どもの発育・発達の理解、②母親の生活や育児への思いの理解、③乳幼児健診・保健師のあり方の理解の3項目について、学生全員から、本プログラムが学習目標の達成に「役に立った」という回答を得た。

表1 今回のプログラムに対する学生の評価 (n=13)

	%
子供の成長・発達の理解に役立った	100.0
母親の生活や育児への思いの理解に役立った	100.0
乳幼児健診や保健師のあり方の理解に役立った	100.0

学生の学びの内容は表2のように、【実際の生活と育児の理解】【母子への共感的理解】など、これまでの机上の学習ではとらえきれなかった育児の実際を学んだことや、画面越しであっても子どものかわいらしさへの共感が述べられていた。また長時間子どもと接する母親の生活、経産婦のそれぞれの困りごと、きょうだいを見ることの大変さなどから、【母子保健に関する既習事項の深化】【母子の状況とニーズの多様性の理解】【複数の児・きょうだいを見る視点の理解】を学びとっていた。

さらに、新型コロナウイルス感染症の蔓延により母親間の交流の減少、出かける場、遊び場の減少から母親が孤立感をもっているという話から【コロナ禍の支援の必要性の理解】がみられた。

若い学生に向けて、協力家族からの「育児経験がなくても母親の話聞いて共感・支持する関わりが重要」という語りや保健師を目指す学生に印象を残し【保健師としての受容的な支援の重要性の理解】【保健師への期待の理解】に関する学びを複数の学生が挙げていた。

#### 2) 協力家族からのプログラムの評価

協力家族である母親の気づき、感想から導かれた評価

は、表3の通りである。

協力家族からは学生の言動に接し【学生の態度への肯定】が述べられていた。

また、協力家族は本プログラムの趣旨を理解し、児が機嫌良く参加し、発育・発達を説明できたことから【発育・発達の理解への協力】ができたと感じていた。

一方で、母親の精神的な問題、睡眠・休息不足など【学生に伝えたかった育児中の母親の大変さ】を学生にもっと伝えたかったということが強調されており、さらに【学生の意図を組んだ対応】をすればよかったという思いを持っていた。

学生に対して、【保健師に期待する母親への支持的関わり】【直接触れ合う体験の意義】など、保健師を目指すにあたっての教育や実践のあり方について提言されていた。

協力家族は、自分以外の場面を相互に視聴したことから、【他の母親との交流・共感】がみられていた。

今回はZoomを用いたことにより、慣れていない場合には緊張すること、学生が複数の画面でマスク越しの会話であり反応が見辛かったことから、【Zoomという手段における対応】の限界や工夫点が挙げられた。

また、参加した協力家族全員から、プログラムに参加したことによる自分にとっての良かったことが記載され【参加への意義と感謝】が述べられていた。

#### 3) 教員によるプログラムの評価

学習目標の達成に関しては、教員が感じた内容は学生の学びと共通していた。教員間の討議からは以下のような内容が挙げられた。

Zoomによるプログラムを実施してみて、メリットとして、子どもを連れての外出の負担が少ない、日常使っている椅子やテーブルなど家庭の様子が分かる、児にとっての環境が変わらないので母子ともにリラックスした状態で参加できる、児の自宅での過ごし方に合わせた対応ができるということが改めて明らかになった。実際の場面の中で、児の動き、母親の抱っこで児が寝入る姿や、児がおやつを食べながら参加する様子に対して、学生は児の発達の理解や、かわいらしさに共感する反応が見られており、コロナ禍で直接の交流が困難な時期のプログラムとして学習目標の達成に有効であった。

画面越しの交流を深めるためには、Zoomのブレイクアウトルーム機能などを使い、小人数のグループで対話をするなどが課題として挙げられた。

### Ⅳ 考察

保健師養成における乳幼児の発達への理解を深める学



表2 今回のプログラムによる学生の学び

記述の概要	カテゴリー
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 出産後の様子や、生後2ヶ月の赤ちゃんの様子を直接知ることができて、とても勉強になった（同3件）。</li> <li>・ 親子の実際の生活について知ることとてもイメージしやすくなった（同2件）。</li> <li>・ 実際の母子の様子を自宅という生活の場からリアルな様子を見せていただく貴重な経験だった。</li> <li>・ それぞれの育児のかたちがあり、楽しいことはもちろん、大変なところも含めて話を聞いたことが勉強になった（同2件）。</li> <li>・ 赤ちゃんとの関わりやどんなことを意識しているかをお母さん自身の言葉で聞くことができて子育てをする親子を理解できた（同2件）。</li> <li>・ 教科書からでは学べない育児の実際を学ぶことができた。</li> <li>・ 実際に子育て中の母親の声を聞くことができ、とても参考になった。</li> </ul>	<p>子育て家庭の実際の生活と育児の理解</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子どもと接したことが殆どないので子どもの姿を見て理解に役立った（同2件）。</li> <li>・ 赤ちゃんが元気そうで、とてもかわいかった（同2件）。</li> <li>・ 大変さだけでなく、喜びや可愛さなどお母さんと一緒に感じさせていただくことができた。</li> <li>・ 育児が大変と話すお母さん方の顔が輝いていたのが印象に残った。</li> <li>・ 大変さがあるなかでも、子どもの日々の成長発達の姿を間近で感じることで育児の喜びや充実感につながる感じた（同2件）。</li> <li>・ 看護師や保健師であっても育児は自分事で大変という事が分かった。</li> </ul>	<p>母子への共感的理解</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 育児の実際の話をお聞かせいただいたことで今まで学んできたことが深まった。</li> <li>・ 紙面事例では想像しにくかったところが、実際に話を聞くことで明確になった。事例の母親や文献からもリンクする部分もあり、母親の悩んでいることの共通性を学んだ。</li> <li>・ (前半略) 母子の身体、精神、環境とあらゆる視点から多角的に物事を捉えて援助を計画していくという、母子保健における援助の重要性も合わせて復習できた。</li> </ul>	<p>母子保健に関する既習事項の深化</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 初産婦と経産婦では、身体の回復や困っていることも異なるであろうことが改めて分かった。求められる支援も違ってくると思うので、個別性を理解することが大事だと理解した。</li> <li>・ 同じ出産と育児ということでも、お子さんの様子や発達、育児が多様であり、母子のニーズは変わってくるということがとてもよく理解できた（同2件）。</li> <li>・ 様々なお母さんとお子さんの実際に触れ月齢に応じた不安や悩み、保健師としてどのような関わりが大切であるか学ぶことができた。</li> <li>・ 笑顔で子どもや夫の話をしている母親の姿を見てると子育ても家庭もうまくいっていると感じたが、「気分が上がらない」と言っているのを聞いて、笑顔や元気そうな裏側のそのような気持ちに気付けないことに怖さを感じた。</li> </ul>	<p>出産・育児にまつわる母子の状況とニーズの多様性の理解</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第二子のお産ということで、きょうだいの関係性や1人目との比較など、兄弟についての視点が私にはなかったと気づくことができた。</li> <li>・ 2人目の子どもの育児は1人目の経験があるから楽と思っていたがそんなことはなく一人一人違うことを感じた。</li> </ul>	<p>複数の児・きょうだいをみる視点の理解</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 経産婦であっても、「前回の経験通り」という前提で援助に入ることなく、母子の身体、精神、環境とあらゆる視点から多角的に物事を捉えて援助を計画していくという（中略）復習ができた。</li> <li>・ 2人目の子どもの育児は1人目の経験があるから楽と思っていたがそんなことはなく一人一人違うことを感じた。</li> <li>・ 型にはめたケアではなく、それぞれのお母さんや母子に合った個別性のあるケアを行う必要があると感じた。</li> </ul>	<p>母子の個別性に沿った支援の理解</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ コロナで母親が人との交流ができないため健診の際などに傾聴することも重要と学んだ。</li> </ul>	<p>コロナ禍の支援の必要性の理解</p>

表2 (つづき) 今回のプログラムによる学生の学び

記述の概要	カテゴリー
<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際のお話をから、今の状況のリアルな声を聞くことができた。母親の喜びや大変だと思う事を受け止め、支援していくことが大切であると感じた。</li> <li>・母親の育児を受容・支持することの重要性をさらに理解できた。</li> <li>・子育ての大変さだけでなく、素晴らしさも共有し、子育て世代の方々が前向きに子育てをできるように支援していきたいと思った。</li> <li>・子育て経験がなくても母親の話聞いて理解、出来ていることを支持する関わりが重要であることを学んだ。</li> <li>・保健師はとにかく母親の頑張りを認めること、一緒に考えること、子どもの成長をともに喜べる存在であることの重要性を学ぶことができた。</li> </ul>	<p>保健師としての受容的な支援の重要性の理解</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・どの母親も保健師に求めているのは特別に難しい知識や技術ではなく、傾聴や様々なサービスや職種につないで貰うことであると分かった。</li> <li>・お母さんが少し気になることを保健師が相談できる専門職につないでくれたという話を聞き、今まであまり首を突っ込み過ぎてもよくないと思っていたが、話を聞き、紹介・つなぐことが母親の安心につながる感じた。</li> <li>・子どもを産むと母親として見られることが多くなるが、ママではなくて名前で呼んでくれることがうれしかったという事が印象に残った。</li> </ul>	<p>保健師への期待の理解</p>

表3 協力家族からの気づき、感想の内容

記述の概要	カテゴリー
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生が真剣に話を聞いてくれ、自分の話に対してお礼を言ってから質問するなど、真剣さと誠実さが伝わってきた。</li> </ul>	学生の態度への肯定
<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもはZoom参加10分前に授乳しZoom中は機嫌よく起きていたので、カメラをみたり、うつぶせの首の座り具合を見せるなど、成長発達を説明するにはとても良かった。</li> </ul>	成長・発達の理解への協力
<ul style="list-style-type: none"> <li>・子育てを苦しく感じるかは子どもの世話だけではないことを伝えたかった。</li> <li>・夫との関係性によって子育てが苦しくなることがある。</li> <li>・産後・育児中の母親は、物音、住居環境、家族の家事協力や、24時間、乳幼児と接することで出てくる悩み、葛藤があり、うつにつながる可能性がある。</li> <li>・核家族、コロナで母親たちはますます孤独に追いやられている。</li> <li>・昔からの風習や社会の子育てへの理解、環境が厳しく、母親に負担がかかる。</li> <li>・乳幼児の育児期に特有の、母親の睡眠・休息不足、経済状況が母親のメンタルヘルスに影響する。</li> </ul>	学生に伝えたかった育児中の母親の大変さ
<ul style="list-style-type: none"> <li>・後から言い忘れたことや、学生からの質問の意図を汲んだ返答ができたのか、悔しさ、申し訳なさを感じた（同1件）。</li> <li>・伝えたいことの1/10も伝えられなかった。</li> <li>・乳幼児の成長・発達を説明したいと思い簡単な台本を用意して話したが、保健師からの母親への支援をもっと思い出して話せると良かった。</li> </ul>	学生の意図を汲んだ対応
<ul style="list-style-type: none"> <li>・未来の保健師に、育児中の母親の状況、思いを理解して欲しい。</li> <li>・子どもと接したことがなくても、ましてや子どもを育てたことがなくても、表面から分からない色々な事情を抱えた母親の味方になって欲しい。それは子育て経験の有無に関係がない。</li> <li>・健診等で保健師に出会った瞬間に、天候、お母さんの荷物、きょうだいの有無を観察して、よくここまで来たね、よくここまで育てたねと認めてくれる、それだけで救われることがある。</li> <li>・母親には我が子をいとおしいと思う気持ちがあり、その気持ちが消えないよう、保健師がその一助になって欲しい。</li> </ul>	保健師に期待する母親への支持的関わり
<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ禍でかなわないが、直接子どもを抱いたり、遊びや動きをみながら関わることは重要と思う。</li> </ul>	直接触れ合う体験の意義
<ul style="list-style-type: none"> <li>・他のお母様と交流でき、悩みや苦しいと感じていることを自分だけではなかったと実感することができた。</li> <li>・他のお母様の話に涙が出るほど共感した。</li> </ul>	他のお母様との交流・共感
<ul style="list-style-type: none"> <li>・慣れないZoomでの参加に緊張した。</li> <li>・オンライン中に聞き取りにくい音量になる場面があった。</li> <li>・自宅の時計アラームやチャイムが鳴り、気がとられ、静かな環境で参加できず準備不足だった。</li> <li>・オンラインで、さらに学生はマスク越しなので反応が見づらかった。</li> <li>・学生にオーバーアクションをお願いすればよかった。</li> <li>・沢山の人の画面からどの学生が話しているか探すのに時間がかかった。</li> <li>・質問はミュートを外すだけでなく、手をあげるなどのアクションがあると分かり易かった。</li> <li>・質問には、どちらの母子が応えるのか名指ししてもらおうとスムーズだったと思う。</li> </ul>	Zoomという手段における対応
<ul style="list-style-type: none"> <li>・貴重な体験をさせてもらいありがとうございます（3件）。</li> <li>・このような（学生、他の母さんとの交流の）機会に恵まれ嬉しく思う。</li> <li>・このプログラムは参加した母親にもポジティブに働きかけてくれた。</li> <li>・コロナ禍で気持ちが孤立してしまいがちな中、教員、学生、他のお母様とZoomを通してでも交流できたことに感謝する。</li> <li>・児童館や子育てサロンが休止中で子育てのちょっとしたこと（うんちが漏れて洗濯が大変、いやいや期で、お店でひっくり返って大変など）を話す相手がいなかったのが日常の話を聞いてもらえてすっきりした。</li> </ul>	参加への意義と感謝

習のために、本学の令和3年度教育向上・改善プログラムとして行った、Zoomを活用し育児中の母子から学生が学んだ内容と協力家族の気づきから、本プログラムの評価を行った。

その結果、今回明らかになった本プログラムの効果と課題は以下の4点である。

1点目は、このプログラムにより、学生は【実際の生活と育児の理解】【母子への共感的理解】のように、テキストや視聴覚教材からだけでは得られない、育児中の母親のストレスや、やりがい、大変さの本音に触れて、育児中の家族の状況の「実際」を理解するという学習効果がみられたことである。プログラムの中で、協力家族の喜怒哀楽や子どもの動き・表情に触れることによって学生の感情にも動きがみられ、育児中の母子の状況について、知識レベルでの理解に留まらない、情緒を伴った理解へと深化した様子が見られた。支援において対象者に共感をもって理解し、関わることは必須であり、そのためにも育児中の家族に出会い、体験から実際に学ぶことに意義があったと考える。

文部科学省・厚生労働省による公衆衛生看護学の教育における「卒業までの達成基準<sup>3)</sup>」には、実習のなかで乳幼児の健診、新生児の家庭訪問を体験することが明記されている。しかし、新型コロナウイルス感染症の蔓延により令和2年度の公衆衛生看護学実習では家庭訪問の実施がままならない状況であった。学生が対象者理解と支援に必要な知識・技術を高めるために、今回のプログラムのように、実現可能な方法での対象者と出会い、実際に学ぶ方法を今後も模索する必要がある。

2点目は、新型コロナウイルス感染症蔓延という状況における育児中の家族の苦悩・孤立感の表出にふれることで学生の【コロナ禍の支援の必要性の理解】が促され、母子保健領域における新たな健康課題を現実のものとして学習する機会となったことである。新型コロナウイルス感染症により、育児サロンの閉鎖、母親同士での対面での交流や出かける場の減少により、母親たちは日常的に孤立感を感じていた。また、常に感染予防に気を使った生活など、新型コロナウイルス感染症により、これまで以上に育児のしにくさを感じていることが明らかにされた。保健師には社会の「動きを察知しながら、地域住民のニーズを把握し、どのように適応していくか見据えることが求められる<sup>4)</sup>」。学生は、コロナ化における育児中の母親のメンタルヘルスという新たな健康課題にふれ、現状を踏まえた支援の必要性を考える機会になったといえる。

3点目は、学生の学びの【保健師としての受容的な支援の重要性】と、協力家族側からの【保健師に期待する

母親の支持的関わり】は、相互に関連したカテゴリであり、今回のプログラムの協力家族との交流によって保健師をめざす学生としてのエンパワメントが促されたといえる。今回は協力家族が卒業生であり、看護職であるということ、学生との年齢差も比較的近かったことも、学生の学びに肯定的に作用している。協力家族は、自分の経験を踏まえながら、学生が新人期に出会うであろう対象者とのかかわりにおける戸惑いを思い図って、若くて経験が少なくても、母親たちの状況、思いに寄り添えることができるということ、またそのことが重要であるというメッセージを伝えていた。また協力家族からは【直接接触合う体験の意義】についても述べられ、コロナ感染症の状況を見据えながら、Zoomのようなオンラインの交流と直接の触れ合いの両方のプログラムを検討していく必要性が示唆された。

看護基礎教育検討会報告書(厚生労働省, 2019)<sup>5)</sup>では、看護学生全体のコミュニケーション能力の向上に加えて、保健師教育について「教育現場において、双方向性の講義やシミュレーションなどを活用した演習、実習と連動した演習等により、更なる教育方法の工夫」を求めている。今回のようなプログラムを充実させることで、保健師に求められるコミュニケーション能力に関して、単にスキルとしてではなく、対象者への共感性と深い理解を伴う支援の能力の獲得につながる可能性が示唆された。

4点目は、協力家族からの【Zoomという手段における対応】の内容から、本プログラムの改善点が明確になった。複数の学生の画面からの参加であることを踏まえ、学生が手を挙げるなどの身振りを取り入れてオーバーアクションで参加すること、進行役が今は誰に何を語ってもらうかを明確にすること、少人数グループでの交流場面を設定することなど、今後取り入れるべきことが明確となった。

以上のことから、本年度のZoomという手段の活用は、学生が乳幼児と母親と交流し、育児中の母子の状況と支持的な関わり的重要性を理解するために有用であることが明らかとなった。

コロナ禍であることから試みたZoomを用いたプログラム実施であったが、乳幼児の発育・発達の理解と育児中の家族の理解には、今後も活用できる方法であると考えられた。当面は、公衆衛生看護学実習においても育児中の家族との触れ合いには制限が求められることが考えられ、学生が母子保健領域の知識と支援技術を高めるために、今後も乳幼児の発育・発達と育児の実際から学ぶ方法には工夫を要する。

今回のプログラムの効果と課題を踏まえ、学生の準備学習、および協力家族との事前の連絡と準備、進行方法などの見直しを図りながら、教育向上・改善に取り組み、保健師教育の質の向上を図ることが重要である。

#### 謝辞

本プログラムに協力くださったご家族に深く感謝申し上げます。

#### 文献

- 1) 一般社団法人全国保健師教育機関協議会教育課程委員会：親子保健活動における公衆衛生看護技術の体系化（第2報），保健師教育，3（1），21-34，2018.
- 2) 工藤禎子・明野聖子・田中裕子：保健師養成における乳幼児の発達に関する学習プログラムとその協力のための育児家庭の登録システムの開発，－平成31年度教育向上・改善プログラムの実施報告－，北海道医療大学看護福祉学部紀要，No.26，51-58，2019.
- 3) 一般社団法人全国保健師教育機関協議会保健師教育検討委員会：保健師教育におけるミニマム・リクワイアメンツ全国保健師教育機会協議会版（2014），－保健師教育の質保証と評価に向けて－，36-37，一般社団法人全国保健師教育機関協議会，2014.
- 4) 金川克子：公衆衛生看護学概論，p29，メヂカルフレンド社，2018.
- 5) 厚生労働省：看護基礎教育検討会報告書，2019.



Learning program for infant and mother support in public health  
nurse education by using Zoom  
-A report of educational improvement program in 2021-

Seiko AKENO\*, Yuko TANAKA\*, Yoshiko KUDO\*

---

\* Department of Nursing, School of Nursing and Social  
Services, Health Sciences University of Hokkaido